小さな体験から

桝田　正子

保育者の揺れ　――ピンチヒッターの体験――

ある日私は、三歳の担任に代わって約四十分ほど保育を引き受けた。その日は卒業式の予行で、そのクラスの担任が年長児と共に大学の講堂へ出かけなければならなかったためである。

九時半頃からだったので、子ども達の遊び始めの時間帯で、「〇〇して」「××を作って」「ねえ、先生」といった要求が多く忙しかった。保育室には日頃からよく出入りして

いるので、子ども達にとって私はなじみの無い存在ではないが、担任の先生に対するのとは明らかに違う態度で、子ども達は私に働きかけてくる。

「△△のお面つくって」

と、自分で描いて切ったお面を持ってきて私の顔を見上げ、

「あそこに黒い紙あるでしょ。あれで、頭のところつくるの」

と、親切に教えてくれる子どももいる。三歳児といえども、私の立場や今の状況を察してそのように行動できるのだと感心しつつ、そうやって子ども達に支えられながらも、そこで必要とされているおとなとしての役割の手応えを感じたりしながら、それぞれの要求に精いっぱいに応えた（精いっぱいというのは、普段から見聞きしたり、その日朝から私が感じとっている個々の子ども達の様子を、その対応に生かしたつもりなのである）。

そして、ひとしきり忙しく対応しているうちに、子ども達はそれぞれに遊びを見つけて取り組み始めたようで、一瞬私の手が空き、私のまわりに子どもの姿が無くなった。それまで夢中で関わってきた状況がフッと変わって、一息つきながらも、その場の子ども達の織りなす雰囲気からちょっと浮いてしまったようなとまどいを感じた。子ども達と物理的には同じ状況に居ながら、その時空間を共有している感覚が持てず、どうしてよいかわからないとまどいである。子ども達はそれぞれ穏やかに遊んでいるように見えて、その様子からは、次の私の行動を動機づけるサインをキャッチすることができなかった。保育者と

してすべきことがあるにちがいないのに、その行動の基準が見当たらなくて、軽い焦りすらも覚えた。無意識に視線が時計に行く。十時少し過ぎ。以前、保育者同志の話し合いの時に、A先生が、大体決まって時計に目が行く時間帯があると言っておられたことを思い出す。その時のA先生の感覚は、今の私の感覚と重なる部分があるのだろうか、それとも全く異なるものなのだろうか、等と漠然と考えてしまう。

私は、所在のない居心地の悪さから逃げるような気持ちで、足もとに無雑作に散らかっているブロックを二つ三つ拾って箱に入れた。だがすぐに、その自分の行動が何とも管理者的でいやだと感じ、また、もしこういう動作を目ざとい子どもが見つけて「もうお片づけ？」と反応するとしたら、それは本意ではないし……という意識が頭をもたげたので、それ以上ブロックを拾うことはしなかった。

このような居心地の悪いとまどいを感じ、色々な思いをめぐらせた時間は、現実にはほんの二、三分のことであったと思うが、私にはずいぶん重く感じられた。

幸い（？）なことに、園庭に居た一人の女児が保育室の出入口で「せんせい」と呼んだので、その呼びかけに応えることを通して、私は再び子ども達の生活の場に合流することができた。そして担任の先生も戻って来られたので、私の役目は終了した。

ピンチヒッターの役割は無事終了したものの、私はその後ずっと、その時に感じた数分

間のとまどいにひっかかっている。あのとまどいは、自分の何を意味するものなのか。あのような状況が一般的にも起こり得るとすれば、そこから何が考えられるのだろうか。

とまどいのうしろにあるもの

前にも書いたように、私は、突然子ども達の雰囲気から浮いてしまった感じがした。その子ども達との接点を見つけることも、できなかった。それでいながら、保育者として何もせずに居ることにいたたまれない気持ちであった。こんな自分自身を改めて見つめ直してみると、いくつかのことに気がつく。

まず、それぞれに遊び始めた子ども達を見た時、私は、穏やかに遊んでいるというように平面的な全体像でしかとらえることができず、一人ひとりをその子ども自身の在り様として受けとめていないのである。毎日この子ども達と継続的に生活を共にしている担任の保育者なら、たとえ表面的には穏やかな状況でも、個々の中に、壁に突き当たって足ぶみをしている様子、周囲との関係の中で自分を発揮しきれずに居る様子、一緒に居てほしいと願っている様子などを識別できて、それぞれに応えることができるにちがいない。求めは無くても、手が空いたら即座に飛んで行って心に寄り添いたい子どももいるの

ではなかろうか。それ等の保育者の意図が生きる状況である。保育者のそのような状況の受けとめ方、行動の表し方ができるはずの時に、個々の子どもの発達の課題や生活の流れを充分に把握していなかった私にはそれができず、子ども達との隔たりを感じてしまったと考えられる。

特に私の場合、日頃から、担任経験が無い為に担任の先生と同様には動けないと、勝手に自分自身に枠をはめてしまう傾向がある。後になって考えれば、子ども達もピンチヒッターの保育者である私を認知してくれているのだから、その立場をもって関わることがふさわしかったのではないかと思われるが、日頃からのとらわれが行動を不自由にしていることが、あらためて見えてくる。

また私は、保育者として何かしなければという思いに駆られてもいた。もし仮にその時、保育の場に設定することを予定していた事柄があったとしたら、私は躊躇なくその準備を始めたのではなかろうか。そして、個々の子どもの状況が見えないまま、自分が持っている予定をその場の行動の基準として子ども達の間に押し入って行きそうな気もする。私にとってあのとまどいは、こんな危機をもはらんだ一瞬であったことにも気付かされた。

体験を通して考える

子ども達の生活の環境は、所属のクラスの範囲にとどまらず、園全体にひろがっていることが多い。今回のような担任のピンチヒッターばかりでなく、色々な立場の保育者と関わりを持つことはごく日常的なことである。保育者も、自分の担任する子どもに限らず、様々な場で、その場の責任ある保育者として誠実に子どもと向き合うことが求められる。最近はティームティーチングの導入等が検討されているところもあり、保育者達がどのような協力体制をとれば保育が一層充実し、一人ひとりの子どもの育ちを支えることにつながるのか、きちんと検討されなければならないことである。個々の子どもの育ちの様子（情報）と、その育ちをとらえる姿勢とを、保育者同志で充分に話し合って調整を図ることが重要なポイントと言えよう。また、話し合いを通して各保育者が、保育者である自分の傾向や特徴に気づき、その気づきをもって主体的に保育に取り組んで行かれるようになることも、同時に大切である。

以前、複数担任制に関して「保育者同志をつなぐものは活動の計画であろう。それが無ければ動きにくい」という意見を聞いたが、私の体験を基に考えるならば、個々の子どもの育ちに関する情報を共有することなしに具体的な活動の計画のみを頼りに保育者達が動いてしまう場合には、その弊害は大であると言いたい。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）